

本学教官執筆書籍の紹介

『生命倫理への招待』

塩野 寛 著、南山堂、2001年、A 5 判、200ページ、定価1900円

松 岡 悦 子

生命倫理に対する関心は近年とみに高まり、医学教育におけるその重要性は誰しもが認めるところとなっている。本書は、生命倫理の分野で重要なテーマとなっていることがらを、とくに医学・看護学を学ぶ人たちにに向けて非常に明快に著した1冊である。

生命倫理の必要性が指摘されるようになった背景には、著者が「はじめに」で述べるように、臨床の場面でこれまでのような「あ・うん」の呼吸が通用しなくなってきたことが大きい。たとえば、社会の世俗化によって宗教的な解決が図られなくなってきたこと、また多様な民族が共存することによって共通の文化的理解が見いだせなくなってきたこと、個人主義の広がりなどから、医師-患者関係における「あ・うん」の呼吸が機能しなくなってきたこと、等々。アメリカでは、このような変化を背景に患者の権利運動が高まった60-70年代に、タスキギー事件などの人体実験が明るみに出され、そして1975年には有名なカレン・クインラン事件が起こった。

本書は、このような生命倫理のながれを「はじめに」でわかりやすく述べたあと、とくに生命の始まりと終わりで生じる問題に焦点を当て、最後の章では医療と法の接点の問題として医療事故を扱っている。そして随所にコラムで、実際に起こった事件や裁判例、著者の体験や知っておくべき知識が盛り込まれ、最後に「付録」として、「ヒポクラテスの誓い」やアメリカの「患者の権利宣言」、「母体保護法」などが掲載されている。目次をあげると以下のようにになっている。

はじめに

- I. 生命誕生と医学の介入……………生殖技術
 - II. 生を絶つことへの医学の介入…妊娠中絶や出生前診断
 - III. 死への医学の介入……………脳死、安楽死、尊厳死
 - IV. 生と死のケア……………ターミナルケア
 - V. インフォームド・コンセント……………病名告知
 - VI. 医療と法と倫理……………医療事故と裁判事例
- 付録

以上のように、著者(旭川医科大学法医学講座教授)は小児科の臨床医であった経験をふまえ、臨床の場で通用し貢献する生命倫理を説いているのが、本書の大きな特徴と言える。このことは非常に重要な視点であろう。なぜなら、生命倫理に参加する研究者の多くが臨床との接点を持たずに意見を述べることが多い中で、本書のように臨床にしっかりと根ざし、現状を把握した上での発言は、バランスのとれたものとなっているからである。そして、ところどころに見られるライブ感覚のことばづかいが、著者の講義を彷彿とさせ、これがまた本書の魅力になっている。

さて、私はこれまで自分の専門の文化人類学の立場から生命倫理を考えることが多かったが、本書を読んで、医学(医療)は生き物であるという感想をもった。医療が現実の生きた人間を相手になされる営みであってみれば、きわめて当然のことであるけれども、生命倫理の諸問題が、時代や人の考え方、マスコミ報道のあり方、新たに開発された技術、人々の欲望や金儲けの野心など、さまざまな力のぶつかるところで立ち現れているさまが、みごとに描かれている。たとえば、ベビードゥ事件、ナンシー・クルーザン事件、農薬による安楽死を企図した山内事件、キボキアン医師の自殺幇助事件、牛乳点滴事件など、さまざまな事件や判決を通して、それらを生じさせる時代や人々の考え方が浮き彫りにされている。事件として立ち現れた生命倫理の問題を追っていく中で、日々変化し、生き物のように予測を超えた動きをする医療の現実が、透けて見えてくるのである。

その意味で、本書は看護学生や医学生にとっては、医療の現実を知るための準備の書となるであろうし、一般読者にとっては学問書としてのみならず、ひとびとの生きざまを考えさせる書物ともなるであろう。

(旭川医科大学・社会学)